

生活実態の歴史

富山における生活の今昔比較

2016.06.21、7.28 to

本稿は7ページと長いので、多忙な方にはp7右列上にあります「まとめの表」をお読みいただくことおすすめします。

1. はじめに

歴史といえば一般には支配層の政治史をさすためか、一般人にとって歴史はつまらないものという捉え方が多い。しかしながら、郷土の歴史となると話は別で、自分らの歴史としての捉え方が自然と湧き上がってくる。例えば、街のアイデンティティは歴史そのものであるとか、歴史ドラマは過去へのタイムスリップとかで楽しまれている。

ここでは、上述の観点で「楽しむための歴史」を生活の面から検証したいと思う。具体的には、生活実態の昨今ということで歴史を捉えることにしたい。なお、構成は以下のとおりである。

- ・歴史の意味
- ・富山の地勢
- ・米中心の生活評価
- ・貨幣価値
- ・近世の生活
- ・大名の年収
- ・人口
- ・生活史、土地
- ・生活実感
- ・人物史

2. 歴史の意味

我ら、歴史といったときに歴史をどう捉えるのであろうか。いわゆる歴史、街の歴史、ドラマで描かれる歴史といった観点から、我らの歴史観をまずおさえておく。以下に、歴史の接し方についての思いをいくつか述べることにする。

<1> 歴史とは、政治の視点から支配層の歴史イコール世の中の歴史と常にいわれている。また、庶民(民衆)にとってはそんな支配のもとでの生活の営みであれば、当然歴史は支配層中心の歴史となってしまう。しかしながら、例えば食や住まいなどの歴史的起源や変遷といったことは民衆には歴史と捉えることができ、生活環境の身近な点から民衆は歴史を大いに支えていることになる。

<2> 歴史が大事といった場合、何が大事かと聞かれるとハタと困ることが多い。「〇〇年に何がどうなって、だからこうだっ」ということはなかなか言えないのではなからうか。その点、「街のアイデンティティや個

性は歴史である」と割合容易に言える。しかも、街の変化も歴史という捉え方が我らにとって一番しっくりもくる。例えば、身近な自分の街で小学校が新しくなったとか、ショッピングセンターができたとかいった事が何といても自分たちの街の歴史となる。

<3> 歴史ドラマの鑑賞では、自覚しようがしまいが当時の生活を自分らの生活をダブらせてドラマを見ている。例えば、お蕎麦屋さんで蕎麦をすすれば何文か、今でいえば何円かといったように、生活環境のもとで時代に浸っている。そんな時、生活環境の昨今について、明確な対比データがあればとか、人の意識構造も変わるのかどうか、などと考えだすと、歴史というものがより一層身近に感じられてくる。

また自分の周辺についても歴史を感じる時がある。これは多分に自分史といえるものでもある。多くの方々の自分史が郷土全体で集積するなら、結果は郷土史ともいえる。歴史とは、多分にそんな自分たちの歴史の匂いのする個々の歴史そのものなのである。

<4> 地元富山の歴史について

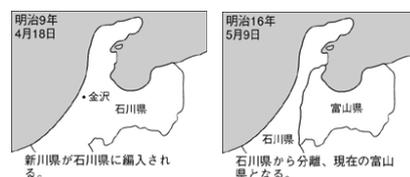
富山県の歴史については、日本の歴史とは違って何となく身近に感ずるので、何となく知ってみたいという気持ちになる。郷土史とはそんなものなのであり、大なり小なり、いろいろな方々が関われるのが一番の魅力といえる。しかも、何かこだわりをもってピンポイントで迫っても、何かしらの新しさを感じず。そんな観点で、私は自分の好きなポイントの歴史として富山の歴史に直面している。

3. 富山県の地勢

3.1 県域

富山県は東西南の三方向で山に囲まれており、県域は自然と地形に沿ったものになるはずではあったが、明

治時代、政治の力関係で石川域と富山域とで境界線が何回も線引きしなおされた。1876年には、富山域を含んで石川県の域が定まった。しかし、石川域と富山域とでは行政の主事業が異なっており、石川の道路整備



富山県域 富山の歴史 HP より

に対して富山の治水事業を優先していたことにより、富山城では分離独立運動が起こり、1883年に富山県が石川県から分離して今日に至っている。**(富山県が1883年に誕生)**

3.2 富山県と全国とを比較に便利な 1/100 ルール

富山県の県域や人口は、2016 統計によれば

人口：106.3 万人

面積：4,247km² (東西 80km、南北 30-70km)

であり、**県域は広からず狭からず、人口も多からず少なからず、地の利としても東京圏、京都大阪圏、名古屋圏、どこにも 2-3 時間でアクセスが可能**である(飛行機では三地域は近すぎる)。富山県は何事にもまとまっている。

富山の人口や面積を全国のものと比較してみる。全国データは 2015 年統計によれば

総人口 1 億 2700 万人 (約 1 億人)

総面積 377,900km² (約 40 万 km²)

である。富山のデータは偶然にも全国データの 1/100 の量である。これを全国に対して「**富山 100 分の 1 ルール**」と称して、何かにつけて使っている。

では、江戸期や明治初期ではどうだったのであるのかみよう。人口については、明治初期には富山県域 62 万人、全国 3,340 万人であり、両者の比が 50 分の 1 となっている。また、江戸期の石高については、富山県域 55 万石、日本全体で 2500 万石であるので、富山は全国に対して 50 分の 1 となっている。このことから、富山県域が何といても加賀 120 万石の一翼を担っていたのだから、わが地方は今よりも存在感があったといえよう。

ここで、話を現代に戻して、経済活動として、全国と富山県の総生産を比べてみる。2013 年度の国内総生産は、名目で 483 兆 1,103 億円、実質で 530 兆 5,915 億円、一方、富山県内総生産は、名目で 4 兆 3,566 億円、実質で 4 兆 6.580 億円となり、確かに、100 文の 1 ルールがあてはまっている。

このように、県の経済力の評価や資産のバックグラウンドの算定の時にも、利用範囲がすこぶる広く重宝されている。

4. 米基準の生活

戦国時代の何万石、何貫、何両は、今のお金にするとのどのくらいか、いつも気になっていた。そこで、中世・近世の経済の要であった米に着目し、米の価値の検証や貨幣価値について主に述べることにしたい。まずは、米について述べる。

4.1 米による生活、米量と農地面積

中世・近世の経済価値は米の量で計っていた。当時は、人間の米消費量を容積で計量し「石」(こくと称する)という単位を使っていた。

まず、容積について述べる。

(俵：ひょう、斗：とう、升：しょう、合：ごう)

1 俵=4 斗=60kg=72 リットル (江戸時代は 3.5 斗)

1 石=10 斗=2.5 俵=150kg=180 リットル

1 斗=10 升=15kg=18 リットル

1 升=10 合=1.5kg=1.8 リットル

1 合=茶碗 2 杯=150g=0.18 リットル

次に石の定義を述べる。

1 石 = 1 人が 1 年間食べるコメの量

360 日×3 合/日=約 1000 合

(1 日 0.4kg)

米の重量 150kg

1 石=2.5 俵



米俵

次に農地の広さについて述べる。坪(つぼ)は皆さんにとってはなじみ深い。坪の他には町(ちょう)、反(たん)の単位があり、それぞれの換算は以下の通りである。

1 町=10 反=ほぼ 1 ヘクタール=

0.01km²=100m*100m

1 反=300 坪=ほぼ 10 アール=1000m²=10m*10m

1 坪=3.3m²



耕地例 3 反 1 区画

収穫量と農地面積については、

1 石=1 反

の関係がある。米 1 石は偶然にも農地 1 反で収穫できる量なのである。(今は生産性向上、詳しくは 4.3 節)

このレートで行くと、1 万石は 1 万反=1000 町となる。富山県域では 55 万石であるので、耕地総面積は

5.5 万町=55,000ha=550km²

となる。これは富山県面積の 13% あたるとなる。2011 年度調査では富山県の水田は 57,000ha であり、妥当な数値である。

4.2 販売店での米

昔は米を升による容積で計量販売していたが、最近はずべて袋詰めであるので、重量で計量した方がわかりよい。スーパーでは、お持ち帰りできるくらいの重さとして 5 kg 米や 10 kg 米を販売している。

買い物客にとっては、重くなくかさ張らないことが条件となり、5 kg 袋が買い求めやすくなっている。ここでは、その容積を求めてみたい。

1 升が 1.5kg、1.8 リットル。
 1kg=0.66 升=1.2(1.19)リットル
 5kg=3.3 升
 =6 リットル= (22cm*45cm*6cm)
 ちなみに 30 kg の場合=36 リットル=(45*80*10)

4.3 米の価値

収穫量について、近世と現代とで比較してみよう。
 近世では、**1 反の米量は 1 石=150kg**であったが、現代では 3.5 倍程に生産性能が上がり、(米の収穫量は)
1 反=3.5 石=8.8 俵=530kgである。

米の 1 人当たり 1 年間の消費量は、近世では 1 石 150kg であったが、近代では二俵(0.8 石)120kg であり、平成に入ってからさらには減って 1 俵 60kg 程度となっている。今の生活を見ると、朝にパン、昼にうどん、夜にやっのご飯、という食生活なら、米消費は一人一日 1 合くらいであり、米消費量は確かに近世の 1/3 程度となっている。

米の値段については、平成初期のころまでは、一俵 2~3 万円が、最近では 1 万円にも低下している。生産量が上がっているうえに、消費量が落ちているため、値崩れとなっている。ここでは値崩れ前のレートを念頭において、米の値段を記すことにする。

1 石=6.3 万円、1 俵=2.5 万円

なお、この値は今の米余りの時代でもスーパーの 5kg 米が 2000 円(高いものでは 3000 円)であるので、1 石 150kg=6 万円が妥当である。

4.4 俸給

俸給として、知行取俸給と蔵米取俸給がある。

蔵米取俸給については、例えば三十俵二人扶持などのような表記がある。これは本人の取り分が 30 俵であり、家来が二人いるという意味である。家来の給金は一人 5 俵(2 石)である。よって上記の数字は主人宅のお給金は主人のみの取り分 30 俵に加えて家臣の取り分 5 俵掛ける二人として 10 俵とを加えて蔵取 40 俵となる。

知行取俸給は、例えば 10 石の水田では 10 石の米がとれるが、これは税率にもよるが 4 公 6 民ならば農民が 6 石、領主が 4 石の取り分である。加賀 120 万石でも実際には加賀藩武士全体では 50 万石しかもらっていなかったのである。

なお、蔵米取と知行取の関係については、知行は水田の米生産量そのものであり、片や蔵米は給金として実際に受け取るコメの量の事である。両者は

知行取石数*税率=蔵米取

である。知行取は石数で表し、蔵米は俵で表している。給金は蔵に保管の俵に入った米でもらっていたから蔵

米であり、俵が単位なのである。

5. 近世の貨幣価値

5.1 貨幣

貨幣については貫(かん)や両(りょう)という重さで価値が計量されていた。その後、重さと貨幣の価値の乖離が始まって、貫や両は貨幣の単位となっていった。

金貨の通貨単位は両である。金貨を重さで計量していたので、貨幣の単位ともなった。重さの単位である斤(きん)や匁(もんめ)との換算を記すと；

1 貫=100 両=1000 匁=3.75kg 1 斤=16 両

1 両=10 匁=37.5g

余談だが、千両箱 1 箱は 37kg と重い。

時代が下るに従い、金貨には金の量を大幅に減らしたうえに銀を混ぜるようになった。

金 1 両=5 匁(正規の半分の重さ)

慶長小判=金 4.4 匁+銀 0.8 匁—手数料
 =4.76 匁(重量)

5.2 貨幣の種類

貨幣には、金貨、銀貨、銅貨(銭貨)がある。金貨は小判として世間には通っており、通貨単位には、両のほかに分(ぶ)、朱(しゅ)、文(もん)があり、換算は以下のとおりである。

1 両=4 分 1 分=4 朱 1 朱=250 文

金 1 両=銀 50~60 匁=銭 4000 文

銀 1 匁=銭 80 文

交換レートについては 5.2 節を参照されたい。



金貨、銀貨、銭貨

リベデイトより

銀貨については、匁(もんめ)が単位である。銀貨は重さが固定されていない銀の塊であり、使用際にはいちいち重さを計測したという。丁銀(ちょうぎん)は 150g 前後(41 匁)、豆板銀(まめいたぎん)は 5~20g、露銀(ろぎん)は 1g の塊である。

銅貨については銭貨ともよばれ、庶民はもっぱら銭貨を使用していた。そのころ出回っていた銭貨は寛永通宝であり、1 枚が 1 文であった。

このほか、貫という単位もある。単に重さからいえば 1 両は 100 貫であるが、貨幣の単位としては、

1 両=4 貫

といわれている。

5.2 貨幣価値

貨幣価値換算については、何に着目しての昨今比較かにより値が結構異なってくる。昨今比較の対象としてよく引き合いにだされるのは、米、大工給金、蕎麦である。

<1> 米に着目

今の米は 5kg で 2,500 円(少し高めに設定)として 150kg 1石は 7.5 万円となる。江戸時代での 1 両で買った米の量は、江戸初期で 350kg(2.3 石)、中期で 150kg(1 石)、後期で 15~30kg(0.1~0.2 石)といわれている。江戸中期に設定して 1 石は 1 両であること。今の米が 5kg で 2,500 円として 150kg 1 石は 7.5 万円となること。これより 1 両 7.5 万円。(p2 にある私の試算では 6.3 万円)

<2> 庶民の暮らしに着目、両から文へ

貨幣価値の試算として、両よりも文の単位で庶民の暮らしで実際の経済活動を評価し検討する。まず両を文に替えてみる。これも、金相場で市場変動していたとされているが、一般には 1 両は江戸時代を通して 4000 文としておくことができる。実際には時期によって以下のように変動していた。

江戸初期では 2000 文、

江戸後期では 6500 文

江戸時代全体としての概算値 **1 両=4000 文**

<2> 庶民の暮らしに着目、文と円

ここで、日常生活を今と昔とで比較する。例えば大工の給金(日当)は銀 5 匁 4 分であり、いまは 1.5~2 万円程であるので、**1 匁 (=100 文) =2500 円程**といえる。(1 文=25 円)

また、蕎麦 1 杯の値段は元禄時代では 8 文(16 文の説も)であり、今では 500 円相当であるので、1 文=70 円程ともいえる。こうしたデータにより、生活実態の昨今比較からは

1 文は 25 円程

が無難なようである。

これより、上述の換算で 1 両を 4000 文とすると、

1 両=100,000 円 (10 万円)

1 貫=0.25 両=2.5 万円

となる。

<3> 検討

1)米の価格で価値試算すると、1 両は

江戸初中期 10 万円=銀 40 匁=銭 4000 文、

25 円/文

後期 5 万円=銀 150 匁=銭 10000 文、5 円/文

幕末期 1 万円

といわれている。ここでは 1 両を 10 万円オガーとすることにした。

2)ここで、貨幣換算をまとめてみる。

米に着目の場合；

1 文 12.5 円、1 匁(=100 文)=1250 円、1 両(=6250 文)=7.5 万円、1 貫文(=1000 文)=1.2 万円、銀 1 貫 (=金 0.017 両/銀匁*1000 匁) =125 万円、銀 1 分=銀 0.1 匁=125 円)

米以外に着目；米の場合に比して 2 倍換算

1 文 25 円、1 匁(=100 文)=2500 円、1 両(=4000 文)=10 万円、1 貫文(=1000 文)=2.5 万円、銀 1 貫 (=金 0.02 両/銀匁*1000 匁) =20 万円、銀 1 分=銀 0.1 匁=200 円)

3)ちなみに、時代劇 TV を見ていると、ナレーションで 1 両 10 万円、千両は 1 億円と言っている。番組制作者も上記と同じように試算していたのである。上記試算は、「武士の家計簿」とかいった文献を整理した HP を参考にした。

5.3 米の価値

<a> 両の換算

米の価値を貨幣で計ってみよう。(4.3 節も参照) 米との換算では相場変動はあったものの、下記の数値がある。

1 両 = 1 石

1 貫 = 25 石 = 3750kg

石の単位で整理すると、

1 石 = 1 両 = 10 万円

現代の **1 石は 6 万円**(p2 の試算)であるから、現代の米が安いといえるが、当時と今では生活水準の違いの問題もあるので、10 万円は妥当な数値であろう。

 貫の換算

TV 大河ドラマによると明智光秀が信長に最初に仕えた時のギャラは 2000 貫 (=5 万石=5 万両) だったという。

5.4 明治時代の貨幣

明治初期には **1 両 = 1 円** で交換されていた。本来ならば、先に述べたように 1 両 10 万円として 1 両 1 円のレートにはなっていない。幕末のころはインフレで物価高騰のため、両が極めて低く評価されたのであろう。(また金貨の質が低下していたことにもよる)

公務員給金やそばの代金など生活実感から割り出された一般的なデータにより、円について価値の時代的変遷を記すと；(貨幣価値が時代とともに低下)

明治の 1 円 = 2 万円

明治前期 1 円
=明治後期 2 円
=大正～戦前 4 円
=昭和 30 年頃 2,000 円
=現在の 20,000 円

6. 近世の生活

6.1 士農工商の各階層の取り分

江戸時代（例えば元禄）の石高は **2500 万石**ほどといわれている。この石高で養える人間は **2500 万人**としてみると当時の**人口は 3000 万人**は妥当なところである。

さて、士農工商、全国における各階層の生活を石高でわりだしてみる。

税率を四公六民とすると、武士の取り分は $2500 \text{ 万石} \times 0.4 = 1000 \text{ 万石}$ であり、農民の取り分は 1500 万石 である。

当時の人口構成は

士（僧侶をふくむ）=**7%** =175 万人
農（漁をふくむ）= $83 \sim 76\% = 80\%$ =2000 万人
工= $4 \sim 7\% = 5\%$ =125 万人
商= $6 \sim 10\% = 8\%$ =200 万人

武士一人あたりは、1000 万石/175 万人=5.7 石

農民一人あたりは、1500 万石/2000 万人=0.75 石

農民の場合、庄屋の取り分が多いので、小作農の農民は食うに困っていたことが数字でも理解できる。

他方、武士の場合、1 石が 10 万円とすると、武士の場合 5 人家族なら、 $5.7 \text{ 石} \times 10 \text{ 万円} \times 5 \text{ 人} = 285 \text{ 万円}$ という試算である。当時の消費水準が低いので、今との比較はできないが、上流階級の目安値はそんな値であろう。これに対して小作は、上流各位の 1 割もないので貧乏この上なかったであろう。

なお、当時は消費支出の半分が食費であり、その半分が主食の米という。**年間の消費は米尺度では 4 石**に相当といえる。

6.2 給金と家臣

前述のように 1 石が 1 人分の年間米消費量である。1 万石大名なら 1 万人を召し抱えるかといえばそうではない。よく戦国の世で兵士を集めるときには、**1 万石で 200 人の兵(家臣)**を雇えるといわれている。一人あたりにすれば、**50 石**となる。家臣一人には家族が 6～8 人だとすると、食料としての米だけでも 10 石、米以外の食糧で 10 石、衣料や贅沢で 20 石、ということではなかろうか。なお、**足軽のような家臣ならば給料は 1 人 5 石**といわれている。足軽には家族もいるので、生活は米を食べるだけに近かったことであろう。

ここで歴史上の人物の給金を見よう。勝海舟の家は旗本の 40 石の給金であった。今でいえば年収 $40 \text{ 石} \times 10 \text{ 万} = 400 \text{ 万円}$ である。確かに苦しい生活である。彼は 37 歳なってやっと 400 石取りに出世して年収 4000 万円の給金となった。

ところで、大名は何人の家臣を抱えているのであろうか。100 万石大名ならば、1 万石 200 人の換算で 2 万人ということではなく、家老やら組かしらなどの役職人間がいるから、家臣総数は 1 万人から 5000 人といったところではなかろうか。（後出）

7. 大名の年収、圏域の基礎力

大名といまの地方公共団体と比較してみたくなった。そこで、石高を中心にして大名の規模を推し量ってみよう。

(1) 人口

江戸時代の初めのころ(1500 万人)に比して江戸時代終わり(明治の初め)には人口は 2 倍になった(3000 万人)といわれている。明治初期 1873(明治 6)年では、人口は

全国 3,340 万人

富山県域 62 万人

富山城下 3.3 万人

(江戸時代 1.7 万人,平成合併前 20 万人)

金沢城下 12 万人

(江戸時代 13 万人,平成合併前 30 万人)

である。江戸時代初期は明治時代の半分として、富山県域では 30 万人いたということになる。今の人口の 3 割である。

なお、人口については石高からも次のように試算できる。**富山県域では 55 万石**であり、1 石 1 人とする、圏域人口は **55 万人**であり、実数の **62 万人**とはよく合う。

(2) 石高（大名の年収）

大名の試算を算定する。1 万石大名なら

1 万石 = 1 万両 = 10 億円

となる。これは大名と領民との年収である。大名の取り分は税率四公六民として、 $10 \text{ 億円} \times 0.4$ で 4 億円となる。米のみの昨今比較でいけば 1 石を 7 万円で評価すると、1 万石は 7 億円となろう。

1 万石 = 10 億円 普通のレート

= 7 億円 低めレート

ということもできる。

加賀 120 万石について算定しよう。

120 万石 = 1200 億円 普通のレート

= 840 億円 (低め)

富山藩 10 万石では

10 万石=100 億円
=70 億円 (低め)

富山県域全体ならば、

55 万石=550 億円
=385 億円 (低め)

(富山藩 10 万石、新川・砺波 35 万石)

であり、結構な石高である。ただし、富山では薬売りで莫大な利益を上げているが、これは対象外とした。

ここで、大名と自治体を比較してみる。現在の富山県と富山市を例に出す。2015 年度決算額は

県：7,500 億円オダ 市：1,670 億円オダ

であり、県と市を合わせて 1 兆円ということになる。これは、県民の総支出との比較ではないにしても、一つの目安としたい。

(3) 次の家臣数に着目する。大名に家臣がどのくらいいたかの資料が少ない。前述のように 1 万石 200 人の家臣が一つのレートによれば、富山県域として砺波や射水、新川と富山藩とを合算すれば、

石高 = 55 万石
家臣数 = 11,000 人

ということになる。しかし、一つのデータとして赤穂藩では 5 万石で 300 人+江戸詰め 100 人程としても 400 人家臣であり、1 万石 200 人レートの 1000 人家臣の 4 割であり、しかもこれが多いとされていたという。よって、安定期の家臣レートとしては

1 万石 50 人家臣

が妥当なところであったのかもしれない。これでもって家臣総数は

富山県域 4,000 人

となる。今の富山の場合、自治体の職員数は、

県：15,000 人オダ 市：4,000 人オダ

であるので、県と市を合わせれば 2 万人ならば、1 万石 200 人家臣のレートに近い数値となっている。

55 万石*200 人=11000 人=ほぼ 1 万人

8. 人口

(1) 意識の高い人の散在率

意識高な人が地域や全国でどのくらい散在しているのかについて、古民家保存運動を例に試算してみよう。

対象は富山県上市町大岩にある築 130 数年の著名な山村の古民家である。

まず、人口比率から述べる。日本の人口は 1 億人、その 1/100 が富山県の人口 100 万人である。そのまた 1/50 が上市の人口 2 万人である。

次に古民家を守るフアンクラブについて。会員は 80

名であり、そのうち特に熱心なのが他府県の 5 名である。地元では、古民家所有者の家族と友人を除いて、熱心なのは 2 人ほどである。

熱心な方が全国 1 億人のうちの 5 人なら、地元の街では 1/5000 の比率(1/100*1/50、1 万分の 2)でいけば、0.0002 の比率をかけて 0.001 人ということである。これを何とみるのか。地元だから関心が増すということではなく、保存運動に時間を割いて思いを入れ込むということは地元でもあまりみられないということであり、逆に関心ある人は全国均等に散在していると考えた方が合理である。この種の(街おこしなどの)問題は地元とともに全国展開の問題と捉えるべきということである。

(2) 地域における人口

世帯数と人口について、わが上市町とわが富山県のデーターをみよう。

町では 16 年 6 月 1 日現在

男 10,221 人 女 11,141 人 計 21,362 人
世帯数 7,905 世帯

(人口 2 万人、世帯数 8000、世帯 1.5 人)

県では 2016 年 6 月 1 日

人口 106.3 万人、世帯数 39.4 万、世帯 2.70 人
わが町では世帯人数については高齢化のため県の平均を下回っている。世帯人数が 2 を割るのは一人暮らしが多いためである。この種の問題について経時変化のデーターも沢山発表されているが、いずれはどこかで扱うことにして、ここでは扱わない。

9. 生活史、土地

土地は誰のものか。土地は原始時代では村のものであったが、律令時代に入ってから権力者のものとなった。その後、権力者が種々変わり、近代になって土地は農民のものとなった。

現代では、貨幣万能の時代に入り、土地が商品となり投機の対象となってからは物価高騰の原動力にもなった。

宅地についていえば、戦前までは、住宅は家あつてのもので、土地は付属といった捉え方がされていた。しかしながら、戦後に入り、住宅難による宅地開発と投機マネーの流入が結びついて、家よりも土地に資産価値が移行し、物価が狂乱状態になったことは記憶に新しい。

10. 生活実感

生活を実感するのはどんな時であろう。自分がある

程度、年を取ってから初めて実感（いや体感）する。その意味では、すべてが歴史的行為ともいえる。みていこう。

(1) ルーツ、振り返り

人間長く生きてると、昔を振り返り、若いときや中堅のときを振り返り、生活を省みることがままある。地域の移り変わりは原風景の変遷として捉え、若かりし頃への回想には自分のルーツとか原点とかを見ることにもつながる。いずれにしても、歴史を垣間見るときに、どんな思いで見ているかが歴史の関わりそのものである。これをもって生活実感が多面的に実感できたということになる。

(2) 実感

歴史というか時間の流れを感じるのは（感じさせられるのは）やはり**給料と(自分の)子供**であろう。今のシルバー世代を対象として述べる。

給料でいえば、1970年代では初任給が5~6万であったが、そのうち時代とともにどんどん上がって2000年代では20万円とアップした。また70年代から働いていた人にとっては、給料は40~1000万円とっていった。その後(2008年)のリマジョック以降、給与体系は変わらず、2016年代に入っても実感は変わってはいない。といったように、歴史がもろに自分(自分たち)の生活に入ってくる。

次に、子ども。これは**子どもの成長とともに、時間経過を実感**し、我が家の歴史は子どもによって刻まれるということである。自分が結婚して、子どもが誕生。子どもは、小学校に入り、中学校に入り、高校に入り、大学に入り、社会人となって、結婚。孫が誕生ってことである。そんな時間の流れで、90年代就職氷河期や08年リマジョックやら、といった社会歴史が割り込んでくる。わが家の歴史と現代史がダブルことを実感するしただいである。(翻弄されるといった方がいいのかもしれない。)

11. 人物史

歴史は事の歴史ではなく、人物の方が面白い。戦国時代に登場する人物は、歴史ファンでなくてもよく知られている。その一方、郷土に地味に貢献した人物はあまり知られてはいない。富山では佐々成政や前田の殿様の名前が出て、現代の人物として、(経済人の)大谷氏、金岡氏、とかいっても知らない方ばかりである。

なぜであろうか。要は、**経済人や技術者では名が残りにくい**ということである。逆に、為政者は民衆に向い何かにつけてアピールし、知名度を高くしている。

しかし、今は昔とは違って、民衆は選挙を通して為政者をチェックできるようになって久しく、為政者による勝手な歴史を作らせないように、民衆の歴史作りが可能となってきている。

12. おわりに

生活実態に着目すれば、歴史的に生活の実像化が可能となって、ひいては歴史は日常的認識そのものという気がしてくる。また、貨幣数量に着目して歴史の縦断的な流れを把握するなら、時代を読むことさえ可能となってくるといいたい。

TV時代劇の鑑賞を例にあげれば、過去へのタイムスリップで我ら時代を堪能していることになる。そこに、1両は今の何万円といったナレーションで当時の生活水準を把握することができれば、より昨今の社会の比較というよりも**昨今社会の同時体験が可能とならば、歴史がますます身近なものになってくる**ものである。ここではそのうちの生活に視点を置き、歴史の面白さを郷土史の在り方にして歴史を論述できた。これをもってまとめとしたい。いかがでしたでしょうか。

◆◆まとめの表：歴史うんぬんについておもしろく語った。特に覚えてほしいこととして、まとめの表を以下に記す。

米1石=金1両=銀50匁=銭4000文 =10万円、1文=25円 農地1反(10アール)で米1石収穫
--

追記1 歴史のとらえ方：

執筆者はもともと歴史ファンである。繰り返して言うが、TV歴史ドラマでは、何万両は今のいくらなのか、100万石はどのくらいの大会社なのか、といったことを思いながらいつも見ている。そんな思いの下地を数量的に準備したいと思ったのが、本稿を書くきっかけである。

書いてみると、なかなか奥が深い。磯田氏の「武士の家計簿」という本ではないが、当時の生活が垣間見られるから不思議である。本来は人の生活をつぶさに見たかったが、まずは米の話の第一とした。それでも、大人や子どもがどんな生活をしていたのかなあ、子供はやっぱり飴玉をしゃぶって遊んでいたのかなあ、いやいや野良仕事で多忙だったことでしょう、想像は膨らむばかりある。そんな思いをもって後書きとする。

最後の一言、**歴史ドラマを10倍楽しく鑑賞しましょう。**

追記2 歴史のとらえ方(続)

よく歴史ファンに対して、「昔のことを知って何するのか」といわれることがままある。そんな時、「温故知新や過去との対話です」と気取って言うこともあれば、「とにかく面白いでしょう」と言うこともある。最近では、街づくりのアイデンティティは歴史からという位置づけもある。このように歴史の位置づけは多種多様であるが、やはり歴史が過去片現在と未来をつないでいることを強調して「現在は過去の結果、未来は現在の延長」という捉え方が一番わかりやすく、理解されやすいと考える。

追記3：本冊子を何人かの友人に見せたところ感想をお寄せいただいた。

- (1) 忠臣蔵や水戸黄門といったドラマよりも、武士の家計簿のような真実の記録の方が歴史の謎を解くカギになる、って指摘しておられた。編者は力づけられた。
- (2) 歴史ファンにはとてもおもしろかった。(続編で?) 当時の人々の生活実史を、とっておられた。理由は、現代の生活の歪み具合を時空間から検証をすべき、社会学的人間関係構成論を検証すべき、ということのようである。編者はまたまた力づけられた。
- (3) 江戸は金本位制、上方は銀本位制。富山はどっち。
- (4) 専門的な指摘に
 - ・富山藩は、分藩したとき、石高に不相応な藩士を押しつけられ、そのため、江戸時代を通して財政不足に悩んだ。葉売りも窮余の策という。ただし編者は富山の葉売りは産業振興という通説に従っている。
 - ・富山藩 55 万石だと 550 億円となれば、現在の県民総生産が(その1万倍の) 500 兆円くらいで面白い。平安時代はどうだったのか。貨幣経済は無いも同然だったし、米を備蓄しても数年しか保存できなかったはずですので。